巻頭言 路

桜の木を見上げて

理事　宮林 佳子

この原稿が皆さんの目に触れる頃は「もうすぐ、今年も終わりですね。お世話になりました。」と挨拶をしていることでしょう。入園時には、玩具棚の縁に掴まってやっと立っていた０歳児が今では、“いっちょまえ”に大きいクラスの子の後を追いかけトコトコ走っています。“いっちょまえ”な子ども達は、いつも今日の自分より明日の自分が成長していることを望んでいます。私の園は西の外れ「日の出町平井」にあります。東京都の形と日の出町の形は東西に長く私の目にはよく似て映ります。私の園がある場所を東京都に当てはめるならば、差し詰め中央区銀座辺り…日の出町唯一のショッピングセンターイオンモールが目の前にあります。電車はJR青梅線からさらに枝分かれしたJR五日市線、朝晩の通勤時間帯以外は、１時間に２本。単線の線路を「ガタ～ンゴト～ン」と電車ごっこのようにのんびり走ります。「何処の地方の話かしら？」と思う方もいらっしゃると思いますが東京都の話なのです。そんな日の出町も各地で待機児が問題になっていた2010年頃には、全国で２番目に子どもが増えた市町村となり、定員を増やす為に各園が改築をし、新園の建設をしていきました。私の園も改築に伴い今までを振り返る様々なイベントを行いました。その際、創設者である父に園名の由来を尋ねると素っ気なく「地名だよ」と…。それならもっと信号機の名前になるような分かり易い名前があるはずだと「それだけ？」と聞き返しました。すると昔を思い出すかのように語り始め「今、イオンの中になっちゃったけど前は、畑の中に馬頭碑と大きな桜の木があったよな…、昔からさくらぎといえばそこのことでよく遊んだよな～」。昭和49年の開園当時からイオンの建設が始まった15年前までは園の前に平井っ原（ひらいっぱら）と呼ばれる畑が広がっていました。春はジャガイモ掘り、夏は虫取り、秋は栗拾い、トウモロコシ畑でトトロを探したり、平井っ原（ひらいっぱら）は子ども達の遊びのフィールドでした。父の幼少期は、近所の自治会館に集まって小さい子も大きい子も混ざって遊んでいたそうです。その中でもさくらぎまでのマラソンごっこが子ども達にとっては一つの登竜門で、自治会館から坂を上りトウモロコシ畑を抜け、約１㎞先のさくらぎまで行って帰ってこられたら遊びの中でも一人前。大きい子に混じって自転車に乗って遠くのお店や、深い淵がある川にも連れて行ってもらえたそうです。「だからな、保育園を創った時も“さくらぎ”がいいと思ったんだ。さくらぎ保育園いいだろ…」と古希を迎えようとしていた父が少年のようにニヤリと笑いました。社会福祉法人を設立し、保育の世界でも『いっちょまえになりたい』。そんな思いが園名に込められていたのだと知りました。幼い頃、父が「佳子、さくらぎまでマラソンしよう」と誘う時は、きっと私と走りながら自問自答し「いっちょまえ」になるべく答えを見つけていたのだと思います。

10年ひと昔とはよく言ったもので、近年はコロナ禍も影響して少子化が一挙に進み昨年あたりから町内の各園では定員割れが始まりました。西の外れの町だから影響は少ないどころか直ぐ様あおりを受けてしまいます。今後の保育園は、少子化に伴う定員割れを始めとして様々な問題に直面することでしょう。また、コロナ禍で幾度もあったような何が正解かわからないことに園長として答えを迫られることもあるでしょう。私も“いっちょまえ”になれるよう、協会の皆様にご指導頂き、皆様と力を合わせ頑張ろう…と冬空に大きく枝を伸ばした桜の木を見上げています。